

精霊たちの棲む大地

湿原を渡る精霊



lyric by aono

photo by hiros



眼下に広がる湿原を

今 私はみおろしている

あそこにいるはずの精霊に

出会いたいと願いつつ

眼下に広がる湿原を

今 私はみおろしている

広い広い湿原の

どこに精霊はいるのだろう



思い切って湿原の 木道に立って見回せば

果てしない広さに言葉もなく

精霊に出会えるむずかしさに

私の心は震えている

気持ちを奮い立たせて私は

足をゆっくりと踏み出した



私があの人を失ったのは

去年の冬のことだった

何も言わずにあの人は

私の前からふっと消えた

一体 何があったのか

私を残してどこへ行ったのか

恨む気持ちもあったけれど

私はあの人を探す旅に出た



あれからどのくらい経ったのか

旅を続けているうちに

花とたわむれ 木々と話す

そんな術を身につけた

木道の傍で咲く花に

私はそっと尋ねてみる

ここに棲む精霊に 会って話をしたいけど

どこにいるのか知らないかと



花はそっと首をふりながら 気の毒そうに私をみた

「湿原を渡る精霊は めったに姿を見せません

ここの沼地に住む私たちでさえ

お会いしたのはかなり前

ましてあなたは人間で ここの住人でもありません」

それでも私は会いたいと

恋人の行方を知るために 命をかけても会いたいと

私は花に訴えた



花はかすかに頷いて

湿原に咲く花たちに 私の願いを伝えてくれる

風もないのに花は皆 頭を東になびかせた

ありがとう 湿原のお花たち

ありがとう 湿原の草たち

私は皆にお礼を言って 東へ向かって歩き出した

湿原を渡る精霊に会うために

東へ向かって進んでいく



東へと東へと 歩いていけども精霊の気配はなく

小さな沼に浮かぶ草も花も

精霊の行方を知らない

たとえ水に囁きかけたとしても

私に答えてくれないだろう

行く手を阻む沼にため息をつき

ただ水面を眺めるだけ

頬を撫でる風は 私を慰めてくれるようだ



体は疲れ 足は重い

そんな私をみかねたのか

沼に浮かぶ水草が手招きする

「水に浮かぶ葉の上を つま先でそっとのってごらん

向こう岸まで渡してあげよう」

好意に甘えて 葉の上に乗る

つま先で トン トン トン と

軽やかに向こう岸まで飛び跳ねる



迎えてくれたのは穂となったチングルマ

精霊に会いたいと 私はここでも訴えた

果穂はその穂をくるくる回し

私の願いを受け入れた

「湿原を渡る精霊は 日の落ちるころ姿をみせる

もしもあなたが辛抱強く ここで待っているならば

運がよければ会えるはず」



私は花と会話を交わし

小さな虫と戯れて しばしのどかな時を過ごす

花も虫も私のために

精霊が現れるのを待っている

花も虫も私のために

日の沈むのを待っている

夏も終わりに近づいた

この湿原の花々は

姿を変えて秋に備える



日はゆっくりと西に傾き

そろそろ湿原を渡る精霊が

姿を現す頃合だ

私はじっと息をのみ

精霊の出現を待っている

風が私の頬かすめ 果穂の頭が風に揺れる

水面が小さくざわめいて

精霊の訪れを知らせている



湿原を渡る精霊の その姿を見たときに

私は傍へ駆け寄った

恋人の行方を知らないかと 尋ねる私に微笑を与え

湿原を渡る精霊は 謎の言葉を私に残した

「冬の初めになったなら

恋人と過ごしたあの山に

一人で登ってくるが良い」

その言葉を噛みしめて 私はまた旅に出る

恋人を探す旅に出る

-end-